

2021年11月7日
宮崎中部教会召天者記念礼拝

ヘブライ人への手紙 12 : 1~3、イザヤ書 43 : 10~12

「神さまの証人」

<証人>

本日は、召天者記念礼拝です。イエスさまを信じて生涯を歩み、天に召された方々。あるいは、教会との何らかの関わりを持つ中で、天に召された方々を覚えます。

今それぞれが、召された方たちとの思い出を、あたたかく、懐かしく。しかしまた、寂しい思いを持って、思い起こされているかも知れません。

今日の聖書、ヘブライ人への手紙 12 章 1 節には、「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている」と書かれていました。

ここで言われている「おびたしい証人」というのは、神さまに信仰を与えられて歩み、そしてすでに天に召された人々のことです。

それは、わたしたちが今、心に思い浮かべている人々のことであり、また、それより以前の、教会で信仰生活を送ってきた、数えきれないほどの、すべての兄弟姉妹のことです。

聖書は、このように信仰を持って生き、先に天に召された人々を「証人」と呼んでいます。「証人」というのは、「真実を証言する人」の事です。

新約聖書はギリシア語で書かれているのですが、この「証人」と訳されている言葉は、実はギリシア語では「殉教者」という意味の言葉です。殉教とは、自分が信じることのために命を落とすことを言います。「証人」と「殉教者」が同じ言葉なのは、自分の命をかけて、信じたものを証した、という意味によることなのかも知れません。

わたしたちは「殉教者」と聞くと、たとえば、信仰のために迫害に遭った人々や、拷問を受けた人々を思い浮かべるのではないのでしょうか。信仰のために、激しい苦しみや困難を耐え抜いて死んでいった人たち。信仰に最後まで生き切った人たち。そして確かに、わたしたちが知る信仰の先達の中にも、先に天に送った兄弟姉妹の中にも、厳しい状況の中で、本当に神さまに信頼して生き切った。神さまの御手を信じて、最後まで歩み通された。わたしも、あのような信仰者になりたい。そう思わせて下さるような方々がおられます。

しかしまた一方で、そうではない方々も、数多くおられたのではないのでしょうか。あまり熱心な教会生活ではなかった。褒められたような人物ではなかった。欠点だらけで、問題だらけだった。あの人はクリスチャンだったが、本当に神さまを信じていたのだろうか。そう思うってしまうような方だって、実際にはおられたに違いありません。

それでも、力強い歩みの人も、たどたどしい歩みの人も、みんなひっくるめて、教会に連なって、そして召されたすべての者たちを、聖書は「証人」と呼んでいるのです。

<何を証しする証人か>

そうであるなら、これらの「おびただしい証人」は、一体どのような真実を証言しているのでしょうか。彼らが、立派に見えたとしても、弱々しく見えたとしても、その生涯の歩みを通して証ししていることとは、一体何でしょうか。

…それは、イエスさまが救い主である、ということです。イエスさまが、彼らと共に、最初から最後まで共におられた、という真実です。洗礼を受け、クリスチャンと呼ばれるようになった人たち。イエスさまに結ばれた人たち。その人たちの人生には、誰一人例に漏れず、イエスさまが最初から最後まで共にいて下さったのです。

わたしたちは、天に召された方々の生涯を通して、その方たちに信仰を与え、導き、守り、救い出して下さった、イエスさまをこそ見つめるようにと促されています。

<信仰の創始者また完成者であるイエス>

今日のヘブライ人の手紙の 12 章 2 節には「信仰の創始者また完成者であるイエス」という言葉があります。

[信仰の始まり]

まず、「信仰の創始者」とあるように、わたしたちの内に信仰を与え、信仰の歩みを始めさせて下さるのは、イエスさまです。

信仰は、わたしたちの方から捜し求めて見つけ出したり、理解して掴みとったりするものではないし、勉強して辿り着く真理のようなものでもありません。信仰は、神さまから与えられるものなのです。

信仰は、神さまを信頼すること、と言ってもよいでしょう。それは、わたしたちが一人で努力をしたり、頑張ることによって出来ることではありません。わたしたちが神さまを信頼するには、まず神さまというお方がいること、そしてこの方が信頼できる方であると知らなければ、神さまを信頼する、信じる、ということは出来ないのです。

ですから、神さまはまず、わたしたちに、御自分がどのような神さまであるかを示すために、独り子イエスさまを、この世に遣わして下さいました。

神さまはイエスさまを通して、わたしたちを愛していること。わたしたちの罪を赦すということ。わたしたちに新しい命を与えることを示し、約束して下さいました。

神の御子イエスさまの十字架の死は、わたしたちの罪を赦すためです。イエスさまの復活は、わたしたちを死の滅びから救うためです。わたしたちが、神さまによって造られたこと。神さまはそのわたしたちすべての人間を、御子の命も惜しまず与えるほどに、愛して下さいたこと。それを神さまは、イエスさまによって、はっきりと告げて下さったのです。

すべては、神さまの側から始まっています。ある一人の人が、信仰を持つということ。それは、神さまの御業に他なりません。神さまがおられ、神さまがその人を愛し、名前を呼んで御許へと招き、その人を救って下さるから、信仰が与えられるのです。一人の信仰者は、神さまが生きて働かれることによって存在しているのです。

教会は、そのようにして、イエスさまの救いの御業によって、神さまに救われた者たちの群れなのです。教会が存在することが、神さまが生きて働かれ、またイエスさまが救い主であることの、確かな証拠なのです。

[信仰の完成]

そして、神さまがイエスさまによって始めてくださった、わたしたちの信仰の歩みは、イエスさまが完成させて下さいます。

わたしたちの「信仰の創始者また完成者であるイエス」がおられる。今日の御言葉は、そう告げています。つまり、信仰の歩みは、スタートからゴールまで、もちろんその間もずっと、イエスさまが支えて下さっている、ということなのです。

わたしたちは、信仰を持ったから、完璧な、立派な人間になれる訳ではありません。

今日の聖書の1節に「すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて」とあったように、わたしたちは救われてもなお、重荷を負っているし、罪が絡みついてくるのです。

信仰を与えられたことによって、これまで負わなくても良かった苦しみを負うことがあります。また、罪を赦されていながら、救いを受け入れたと言いながら、それでもなお、神さまに従えないことがあります。神さまを疑ったり、神さまの思いよりも自分の思いを優先したり、神さまの恵みを忘れて、遠ざかってしまうことがあります。自分のように隣人を愛すること、敵を赦すことが出来ないでいます。

信仰者の歩みとは、教会の外から見れば、真面目なもの、立派なもの、清らかなものと思われている節がありますが、実際にはやぶれかぶれで、愚かで、神さまの御言葉に従いたくても従えない、まったく惨めな歩みを繰り返しているのです。

わたしたちは、罪人です。罪人でありながら、一方的に神さまに罪を赦された者なのです。ですから、神さまの力をいただかなければ、自分で自分の信仰を守り通すなど、最後まで信仰の道を歩み通すことなど、まったく不可能なのです。

わたしたちは、召された人々の信仰のことを考えるとき、自分の信仰についても、最後にはどうなっているかと、心配になってくるのではないのでしょうか。

何かが起こると、すぐに不安になり、じたばたしてしまう。神さまに心から信頼しているとは言い難い。もし迫害なんかが起こる時代だったら、自分は信仰を捨ててしまっていたのではないか。神さまを拠り所としているといいながら、いざとなれば、自分を守るために、神さまを知らないと言ってしまっているのではないか。

わたしたちは、立派に信仰を生き抜く自信なんて、持ちようがありません。それに実際、

わたしたちは罪に対しても、悪に対しても、何の力もない、まったく無力な者なのです。

でも、信仰を完成させて下さるのは、イエスさまなのです。救いを与えて下さるのは、イエスさまなのです。イエスさまの方が、何があっても、わたしたちの手を決して離さない。わたしたちを絶対に諦めない。わたしたちを見捨てない。

先に召された信仰者たちが証ししているのは、このことに他なりません。

イエスさまは、忍耐強いお方です。愛によって、すべてを耐え忍んで下さるお方です。わたしたちの罪も、反抗も、弱さも、愚かさも、耐え忍んで下さる。すべてを覆って下さる。

イエスさまの十字架の苦しみと死は、まさにそのことを示しています。

ヘブライ書の12章2節以下には、このようにあります。「このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。」

どれだけ裏切られても、罵られても、見捨てられても、イエスさまは人を愛し抜かれました。ご自分に敵対する者のためにも、ご自分の命を与え、その罪をご自分が担って、すべての裁きを一身に引き受けて、息を引き取られた。最後まで愛し抜いて下さった。

このイエスさまの忍耐があるからこそ、わたしたちは何度でも罪を赦され、何度でも御許に立ち帰り、おんぶに抱っこされながら、信仰の歩みを最後まで走り切らせていただくことが出来るのです。

たとえわたしたちが、氣力を失い、疲れ果ててしまうことがあったとしても、わたしたちのために、忍耐された方のこと、恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍ばれた方のことを、よく考えなさい。この方をただひたすら見つめなさい。そう言われています。

イエスさまがご存じない、わたしたちの苦しみ、痛み、悩み、恐れはありません。神さまに見捨てられた、と感じた時の、わたしたちの絶望の叫びさえも、イエスさまはご存じであり、ご自分自身が十字架の上でそれを叫ばれました。

どんな苦しみの底にも、絶望の果てにも、そして、死においても、葬られた墓の中にあっても、わたしたちは共にいて下さるイエスさまを見出すことが出来ます。

このイエスさまを思いなさい。このイエスさまを見つめなさい。この方にこそ、あなたの支えがある。この方にこそ、あなたの命がある。

おびただしい証人が、イエスさまを証ししています。

わたしたちは今、天に召された方々の信仰の生涯、良い時も、悪い時も、生きることにしても、死ぬことにしても、そのすべての歩みを通して、どんなときにも見捨てずに、共にいて下さり、愛して下さる方が確かにおられる、との証言を聞いているのです。

そして、召された方々が見つめていたお方、わたしたちの罪を贖うために死に、そして復活し、生きておられるイエスさまを、今、わたしたちも共に見つめているのです。

<救いの完成>

そして、救いの完成、信仰の完成とは、地上の生涯をクリスチャンとして歩んで終える、ということだけではありません。

イエスさまを信じる者は、この地上で死んでもなお、終わりの日に、イエスさまが再び来られて、復活と永遠の命を与えて下さることを信じています。その日こそ、救いの完成の時なのです。

その、やがて来る終わりの日のことを、聖書の「ヨハネによる黙示録」はこう語ります。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」(21:3~4)

信仰者にとって、人生の目的、ゴールは、世における人々が思い描くような、この地上をいかに幸せに生き、成功し、自分の目的を達成できるか、ということではありません。

わたしたちの人生は、思い通りに行くこともあれば、いかないこともあります。成功することもあれば、失敗することもあります。長生きする人もあれば、短い生涯の人もいます。死んでしまう時に、いい人生だった思える人もいれば、後悔や、悲しみを思う人だって、実際にはたくさんおられるに違いありません。

でも、地上のそれらのことで、わたしたちの人生の価値が決まるわけではありません。

わたしたちの人生は、存在は、神さまが命を与えて下さり、神さまがその存在を愛して下さり、神さまが認めて下さるから、価値ある貴いものなのです。そしてわたしたちのことは、神さまが、最初から最後まで、守り、導き、完成させて下さるのです。

そのように導いて下さる神さまを知ること。その神さまを礼拝し、神さまと共に生きること。そこにこそ、わたしたちの本当の幸いがあります。

そしてこの地上の歩みを終えてもなお、わたしたちは滅びの死に渡されるのではなく、終わりの日に復活し、神さまとの親しい交わりの内に、また、召されたすべての兄弟姉妹と共に、永遠の命に生かされるということ。その地上の歩みを超えた、救いの完成に、わたしたちの本当のゴールはあるのです。

今日行われる聖餐は、終わりの日の、神の国の食卓の先取り、と言われます。イエスさまの十字架の死によって罪を赦され、新しい命を与えられた者たちが、終わりの日、復活と永遠の命に与って、イエスさまの天の食卓の席に招かれる。その希望の約束を、この世にしながら先取りして味わい知る時なのです。

神さまは、この恵みの食卓に、すべての者を招いておられます。そして、先に天に召された方たちもまた、家族や愛する者たちが、一人でも多くの者たちが、この恵みの食卓に共に与って欲しいと、祈ってこられたに違いありません。教会もまた、いつもそのことを祈っています。この祈りに、イエスさまが答えて下さらないはずがありません。信仰は、イエスさ

まによって始められます。もう既に、お一人お一人にあって、神さまの恵みの御業は始まっています。

だから今わたしたちは、おびたしい証人が証しした、イエスさまの忍耐と愛を、信じたいのです。先に召された人たちを、最後まで愛し抜いて下さった救い主イエスさまに、わたしたちもまた捕らえられていることを、知りたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

先にあなたの御許に送った、わたしたちの愛する人々は、イエスさまが信仰の創始者であり、完成者であること。イエスさまが、わたしたちのために苦しみを耐え忍び、わたしたちを愛し抜いて下さる方であることを、確かに証ししておられます。どんなに罪深く、弱い、無力な者も、イエスさまが救いの御手を離さずに、捉えていて下さることを、証ししておられます。どうぞわたしたちが、その証言にしっかりと耳を傾け、信仰の先達と共に、信仰の創始者であり完成者であるイエスさまを見つめ、信じる者となり、イエスさまの御力によって、忍耐強く歩む者となる事が出来ますように。

そして、わたしたちに、復活の希望が与えられていることを感謝します。しかし、地上において、愛する者が召され、姿が見えなくなることは、やはり寂しく、悲しみを深く覚えませぬ。あなたは、このわたしたちの心をよくご存じです。どうか、あなたの恵みによって、癒しと慰めと平安を、ここに集ったお一人お一人に豊かに与えて下さい。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン